

20161111 みやぎ地域復興ミーティング 事例共有報告③



●登壇者

野田北ふるさとネット・野田北部まちづくり協議会 事務局長 河合 節二 氏

皆さんこんにちは。神戸市長田区野田北部地区から来ました河合節二です。こういう場にお招きいただきまして、非常にありがたく思っております。実際に阪神・淡路大震災から来年早々で22年になります。地域がどうなっているかと皆さん思われますか。神戸市内の大部分はほとんど日常に戻っております。では地域に問題がないのかというと、結構問題があるんです。それは何かというと、日常の問題がでてくると思います。ですから震災当時というのは非日常、それこそ復興を早くやらないと人が戻ってこない。お店が早い人が住むのが早いのか、卵という話をしょっちゅうしていましたけども、とにかく1日も早く復興していこうと考えて走り続けてきたわけです。

今日お話しするのは、我々の地域がどういうところであったのか、それと震災が起きて、どう動いて、今何しているのか、そんなお話にお付き合いいただければと思います。

○野田北部地区概要について

まず我々の地域って非常にコンパクトなんです、神戸の中心地である三宮から西へ約7キロ弱位。長田区と須磨区の間、長田区側のところに位置します。ここ12ヶ丁約13haしかないんです。これで一つのコミュニティエリアとなっております。皆さんからすると、ちっちゃいとこだねって思われるかもしれませんが。歴史的には古くないんですね。大正時代の末期に畑などがあったのを神戸市の耕地整理によって市街地が作られました。ざっくりまだ90年少しくらいしか経っていないのかなと。我々の地域、野田北部のエリアをもう少し、東方向に行きますと、鉄人28号が建っているところです。比較的それほど古くない市街地があります。大戦後の航空写真がありますが、あまり戦災の被害は受けていないのです。当時から平屋の長屋って二戸一とか四戸一とかそういう長屋がみっしりと出来ています。国道2号線が地域の

南側を東西に走っています。戦災復興の区画整理で道路の拡幅工事をやっている最中の航空写真がありますが、平成になってからの航空写真と比べても、見た目全くかわりません。相変わらず木造密集。以前の写真と比べて代わりの無いのが当たり前で実際に建っている家も建築基準法を守っている家が無いんです。いわゆる既存不適格な建物ばかり。なんでこんなことが起きたのかと言いますと、土地が狭いんです。東日本では区画整理で最低 100 坪とか言われておりますけど、我々の地域に行ったら平均 15 坪あるかないか位です。その敷地しかないもので、目一杯立てている家が増えていきました。完全に災害に強い街ではなかったということです。その当時の路地の状況として、ただでさえ狭いところ樹木や工作物置、ごみ箱などを置いたりして、さらに狭くして、人ひとりがすれ違うことすら出来ない、そういう状況だったわけです。

○まちづくり協議会の設立と阪神・淡路大震災

これらを改善するために平成 5 年の 1 月に野田北部まちづくり協議会を立ち上げたわけです。といいましても、家を壊して道広げる訳にいきませんので、そういうことは出来ない。でもやはり生活環境を改善していこうと思っていました。この時にはすでに高齢化が始まっています。若い人間はほとんど郊外のニュータウンへ出て行ってしまっていますので、高齢者ばかりなんです。当然空き家の問題や一人暮らしの問題もある、それらをなんとか改善していこうということで、まちづくり協議会が何を考えたかということ、地域の中心にある公園をリニューアルしようということを考えました。もともと神社だったところを後に神戸市が買い取って、公園にしたんですけども、神社の色がそのまま残ったような公園で、これをもう少しきれいにしようと思いました。まずは周辺に道

路があるんですが、歩道がない。それを何とかしようということで、公園の整備をまちづくり協議会で、発足後約 2 年弱かかって実施したわけです。完成したのが平成 6 年の 12 月 18 日。出来たと喜びもつかの間。あの阪神淡路大震災になってしまったというころです。

せっかくリニューアルされた道路上が倒壊家屋で塞がってしまってどうしようもない状態です。震災直後から火がでてましたが消防も来れない。燃えるに任せるだけとそんな状態です。1 月 17 日に撮影した画像がありますが、当日の比較的早い段階の写真なんですけど、看板もある 2 階建ての建物の 1 階がべしゃんこになっています。これもやがて奥から火がきて、全て焼失したわけです。リニューアルされた公園が一時避難所という形でみんな着の身着のまま出てきている状況でした。阪神・淡路の震災のあった時間というのが、早朝の 5 時 46 分だったのですが、これは安否確認する必要がほぼなかったんです。家族みんなそろっている時間帯だった。こうやって避難している人もいますが、この裏で他の人は何やっているかという、生きている人と埋まっている人を助けに行っているんです。大体密集市街地ですから、近所は隣とくっついているようなもので、どこで寝ているかみんな知っているわけです。それで助けに行かないといけないだろといっても道具も何もないので、素手のままでやっていました。そんな状態が避難している映像の裏で行っていたということです。実際に火災にあったところについてがれきの山となっておりますが、私も東日本の 3 週間後に被災地をずっと回らしていただいて、それこそ気仙沼の鹿折の方にくとすごくデジャブというか、風景を見たことある風景だなと記憶が蘇ってきました。

○区画整理事業と共に進んだ復興プロセス

100 日後の地域の航空写真を見ると、茶色に見える更地と雨漏り防止のブルーシートだけになります。100 日であまここまで出来たのかと後から言われますけど、どうにかこうにかやったんですが、悲しいかな、我々地域の二ヶ丁だけが区画整理事業内だったんですね。お隣の六ヶ丁とあわせて八ヶ丁が区画整理のエリア。当然皆さんご存知のとおり、区画整理といういわゆる都市計画の事業ですけど、われわれのところは従前の土地が使えました。皆さんのところは住宅の建てられないところになってしまったというのがあるんだと思います。我々のところは使えるんですが、道路広げて公園作るという、その分の土地をみんなから提供してもらわないといけないなど、そういう問題点がありまして、区画整理とか再開発事業に関して神戸市内で猛反対が起きております。でも冷めた目で見ますと、国の金というか公共のお金で整備してもらえるわけです。ニュータウンになるんです。

では土地をどのくらい取られるんだというものもあるんですが、表向きは神戸市と地域が協議した結果上限 9%、わずかなんです。ところが一戸あたりの敷地面積が小さいところが 9% としてしまったら本当に家が建たないかもしれない。そういうところについては減歩ゼロなんです。ゼロだとインチキだと思われるかもしれませんが、あとはお金で清算という形をとりました。結局区画整理事業の最後の清算が残ってきますから、それで清算という形で対応して状況にありました。

あとは結構神戸市で土地を買い取っていました。買い取った土地を区画整理事業の中で活用しているんで、みなさんの最終的な減歩率は平均すると約 4% だったと思います。だから区画整理するところはいいんですよ。それぐらい先を読んでやっていたら合意が得られるのかなと思います。お隣の

六ヶ丁とは仲があまり良くないというのもあり、二ヶ丁だけ先に進めたんです。それぞれが想定換地として、ヒアリングしながらジグソーパズルをはめるように埋めて行き、合意出来ているので二ヶ丁だけ切ってくれと神戸市に話していました。神戸市が実際に進めようとしたところで、隣の六ヶ丁がなし崩し的に合意していった状況にあります。そして八ヶ丁で合意になったんですが、我々が先行してまちの想定換地やっているんですぐ着工できたという経過がありました。ですから実際には合意が得られるまでに 2 年かかっていないんです。一番最初に合意が得られて着工できたという我々の地区の二ヶ丁がある。では区画整理に入っていないところはどのようにするのか、実際お金があったらすぐに再建できるんですが、しかし一番困っているのはまた法律違反した状態で建て替えたらどうしようとか、そのような問題がありまして、それらを踏まえて、建て替え方のルールを決めようとなりました。簡単にいいますが、これも全員合意というのが必要になってきます。皆さんもご存知の様に経験されていると思いますが、全員合意なんて出来ると思いますか。まあ無理ですね。ということは何かというと、積極的の反対者を出さない事が重要です。それと「お前が賛成なら反対だね」というように嫌われない事、よくある感情的な問題があります。そういうことを無いようにして、なおかつ絶対に聞いてなかったと言わせない事など、それだけ丁寧に説明していくというのが重要なのかなと思います。

実際に東日本はいろんなところにお邪魔しましたが、皆さんまじめだと感じました。折角、防災集団移転という計画書を書きながら規模縮小ばかりしていき、いつになったら決まるんだというのが結構あったと見聞きしておりますけど、地区長さんが実際に腹を括ってやってみたらいいんで

すよ。そうしないと国のお金もいつまで続くかわかりません。余ったら余ったでいいからやるっていうのも必要なのかも分かりませんね。

○少しずつ見えてきたまちづくりの成果

野田北では街並み誘導型の地区計画と考えました。従来の建設ではなく、地区計画を取り入れた建て方を考え、建ぺい率の増加など合わせてこういう整備法を考えました。道ありきですが、この建て方のルールの場合建物が建て替わらない限り道が広がらないのでいつになったら出来るか分からないですけど、将来的には5メートルの路地空間が生まれるという予定では来ています。20年過ぎてもポツポツくらいしか目に見えた形で成果は表れておりません。まちづくりはプロセスだっでよく専門家は言われるんですけどね、目に見えるまちづくりをやらないと、やっている我々は気合が入ってこないんです。例えば、道幅も現状のままでもいいから美装化しようよと当時神戸市それから建設省などをかけあって、いろいろな観光地がやっているような石畳の道路に変えて路地を美装化していった。道路から入った感じなんです。いろいろ遊びもいれてやっていこうと。

○ハードの復興からソフトの復興への転換

平成11年にはハード整備に関しては目途が立ったということで、ハードからソフトに切り替えていこうとコミュニティ宣言というのをやったわけ。といたしましてもハード系としてずっと動いてきたので、何していいか分かりませんでした。でもとりあえず、全戸配布している情報誌「かわらばん」を発行し配布しましたし、路地の美装化もやりました。それと災害公営住宅の高齢者にふれあい喫茶なども開設したりしています。その流れの中で東日本震災が発生してから言い続けていることがあり、コンパクトタウンというのをお聞

きになったことはないですか？土地が広すぎと思うんです。よく一人1台車で行くなんてことを聞きますが、車のない社会というのを考えたらいいんじゃないかって思います。だから集落ごとは集落ごとでそれを一つのコンパクトな街にしたいんじゃないかと提唱しているのですが、だれも聞く耳持ってくれませんでした。

○コンパクトタウンを目指した

野田北ふるさとネットの発足

我々は最初からコンパクトなんで、これから地域をどうやっていこうかという時に、コンパクトタウンを神戸市と一緒に勉強しながら、ふるさとづくり検討会っていうのを始めたんです。そこから平成14年1月に野田北ふるさとネットというのを発足しました。なににするかというと、地域の中に行政の縦割りと同じように団体、組織、NGOやNPOなどいっぱいあるんですけど、それらを一つにみんなで声掛けをして、話し合いをする場をつくることをしました。それぞれ独立したら一つの団体なんでしょうけど、一つでやるっていても限界があるので、みんなと手を組んでやれば、話し合いで協力すればもっと幅広い事が展開できるということで、たまたま集まる場があったので、そこで各組織の代表なり役員なり、それと行政です。集まってもらって、いろんな情報交換をしました。今日の話に出てきましたけども、事務所があり、事務所には専門のスタッフがいるので、情報の集約が出来るんです。やはりそういう場がないとなかなか難しいということがあります。

○「飲みニケーション」を通したまちづくり

それと実際に新潟や山古志もふくめこちらにお邪魔して思ったんですが、飲み会が出来ないですね。私が思うに、まちづくりは「飲みニケーション」なんです。我々の地域では歩いて集会所に行

けるので、飲んでも大丈夫なんですけど、宮城県では車使って移動して集まらないと出来ないというのが非常に辛いですね。山古志でもそうでした。集会場に行くときは山を下りないといけないとか、すると飲めない。だからそういった「飲みニケーション」が取れにくいのは辛いとこかなと思います。我々の場合住民集会も毎日飲みながらやってきました。でも住民集会をやったことで市の職員と我々まちづくり協議会の人間と専門家、まちづくりのコーディネーターなどのコンサル、みんなで今日はどうやったらいいと飲み会をずっと続けてやってきたわけです。やはりそういう場というか機会がないと、言いたい事も言えないのかなと思いますね。

○行政との協働による「美しいまち宣言」

ハードの整備はきれいになったんですけども、モラル・マナーなどの話が湧き上がってきました。地域課題などをワークショップで出して行こうということで、地域住民、若手のプランナー、行政職員いっぱい集まってやりました。その中で神戸市がここから条例をつくったんですけどね、住民主体でやるのか、行政でやるのか、あるいは住民と行政が協働してやったらいいのかというのが出てきました。その中で自分に出来ることはすぐにやろうということになり、ごみステーションの不法投棄のパトロールであったり、あと自主的に地域清掃だったり、どこに何が落ちているか地図上に記入していったりしました。それと「美しいまち宣言」なども作りました。内容もワークショップで勝手に作って勝手にやったらいけないので、全所帯・事業所にパブリックコメント、意見書求めました。

そんな「美しいまち」いらん言う人いませんので、比較的すんなりと意見は通りました。その流れの中で行政と締結したわけです。その他にも鷹

取駅前が人が本当に通れないくらいの放置自転車だらけという課題がありました。それを何とかできないかということで、地方自治法の改正などで公共施設の管理が出来るということがあり、ただ法人格を求められたので、地域のNPOと連携して協働事業という形でやっています。ただ2年目からは、後で言いますが、ちょうど4年ごとの切り替わりなので、自治会の方で運営をやるうと考えております。ごみのルールについても5か国語表記やっています。やっと路地の整備も10年間で28路線を整備しました。現在はメンテナンスを続けてやっております。震災資料室もオープンしたんですが、この6月末で閉鎖になりました。

○東日本大震災・被災地への若者の派遣

またなかなか宮城県まで訪問する機会がないので、何が出来るかなと思い、行きたいって若い人がいたら行かしてあげようと考えました。経費面などを我々の方で見て、派遣などをしていません。幸いなことに神戸から現地に入ったボランティア団体によく知っている人がいたりとか、あるいは阪神・淡路大震災の当時大学院生だった人が今、大学の准教授として石巻にはいってますから、そういった所に繋ぐということをしています。いろいろと考え、それくらいの支援しかできないと思っても、南三陸志津川でたまたま僕が行ったときのアテンドしてくれた方が宮城大学の先生なんですけど、当時連れてきた宮城大の学生さんが父の工場も家も全て津波で流されたと話しており、じゃあ何か支援しようということで彼に支援していました。最終的に牡蠣の養殖の再開に向けて神戸のネットワークで繋いだりしていました。「そのかわり牡蠣できたら送ってね」と話していると、3年前くらいに、牡蠣をいっぱい積んで持ってきてくれました。そういう目に見える関係の支援っていいなっていつも僕ら思っています。これも陸前

高田市の長洞地区との繋がりもあります。他には学生交流ということで宮城大、神戸大、スペインと被災地学生交流会を実施し、特に神戸大が大槌高校の方へ入ってフォローをしたりしています。

○今後に向けて

地域の拠点が2年半前によく完成しまして、行政から4割くらいの支援は受けましたが、6割は地域でお金を出して建てました。これがあることでまた地域の幅が広がるなと思います。また建物を建てるにあたって、名義を自治会の名義にしました。個人でやると自治会長個人の名義になるので、相続財産になってしまうんですね。これも認可地縁団体という法人格で担っています。

ということで我々のまちづくりはまだまだ続くということで以上になります。(終)